

弓岡隼人の事件簿

レガシー・コイン・ラブソディ

ナゼカイチロウ

友人からのEメール

秋風が吹く中、弓岡隼人は、湘南へ向かっていた。彼は、感慨深そうな表情を浮かべながら、電車の中でネットブックを広げ、Eメールを読んでいた。しかし、その内容が進むにつれ、目の鋭さが増していたのであった。Eメールの主は、相澤真治。隼人の大学時代の友人である。ここ十年來、風の頼りもない状態だった。この突然の連絡により、彼の身に何かが起きたことが、隼人には、容易に想像できた。Eメールは、古風な屋敷の写真と不可解な紙の切れ端の画像が添付されていた。写真の屋敷は、これから、隼人が、相澤と共に向かうであろう場所である。紙の切れ端は、水に濡れ、ふやけており、印刷の跡が残されている。しかし、それが何の一部分であったのかは、理解ができなかった。隼人は、添付の画像ファイルを閉じ、相澤からのEメールを、また読み返すのであった。

「やあ、隼人。最近の調子は、どうだい？僕は、現在、丸菱印刷で営業をしているよ。とりわけ代わり映えのない毎日だ。君のうわさは、よく耳にしているよ。僕らの学生時代から、特別優秀でトップの成績だった君が、どのような仕事で活躍するか非常に興味があったのだが、探偵とは、驚いたよ。確かに君の学生時代からの論理的な思考や、独創的な発想力は、複雑怪奇な事件ほど活かせるものはないと今更ながら気づかせてもらったよ。

やや回りくどい言い方をしてしまったが、今回は、学生時代の友人としてよりも、探偵としての隼人に頼みたいことがあったからなんだ。

一ヶ月ほど前のことだった。僕の住む府中のマンションに中年の男が訪ねてきた。40半ばでスーツをぎりぎり着こなせるかどうかのやや太り目の男だった。鍵本という弁護士だった。僕は、つい先日、親父を亡くした。僕は、小学生のころに交通事故で母を失っていたから、男手ひとつで育ててくれたのが、父、相澤裕明だった。父は、宮城出身の東京に勤める普通のサラリーマンだった。母の死は、僕ら親子にとってつらい出来事であり、仕事を続けながら、僕の面倒を見てくれた父との思い出はつきない。大学を無事に卒業をさせてもらい、就職して幾分か経ち、自分の生活に余裕ができたところでの父の訃報だった。鍵本弁護士の奇妙な来訪は、この父に関係があるらしい。

遺産相続。弁護士は、これ以上ないほどに単刀直入に用件を切り出した。父、相澤裕明の遠い親戚にあたる老人の遺産が、この僕に継がれるというのだ。老人の名前は、君塚栄進。彼は、一代で巨額の富を得たまさしく、立身出世の人物だった。彼自身は、戦時中に親とはぐれ、天蓋孤独の身と信じきっていたのだが、癌を先刻され、余命幾許ない状態で、ようやく唯一の血縁者、僕の父、相澤裕明の存在を知ったのだった。彼の死後、父へ渡されるべき遺産が、鍵本弁護士の搜索により、僕のところに伝わってきたのだった。想像してほしい。父の死の衝撃から、幾日も経たないうちに、狐につままれたような事実を聞いた僕的心情を。しかし、その追い討ちをかけるような事実を弁護士から伝えられたのだった。君塚栄進氏の遺書には、こう記してあった。

「私の全財産は、たった一人の身よりである相澤裕明氏に譲る。しかし、相澤裕明氏に不慮の事故があった場合、その血縁の者が権利を得る。ただし、遺産を相続するために次の謎を解く必要がある。

黒猫の部屋で、馬の駆け行く音が鳴り響くとき、大蛇の門が開くべし。

この謎を解くことにより、私の財産を受け継ぐ権利が得られる。」

鍵本弁護士は、苦笑した表情で僕の顔色を伺った。

「厄介な事に巻き込まれましたな。挑戦するのも、あきらめるのもあなた次第です。」

途方にくれていた僕は、思い出したのだった。探偵である君の存在を。君が僕の協力を惜しまないことを心から願っている。

相澤真治」

隼人は、鋭い眼差しのまま、Eメールから視線をずらし、車窓の外の景色を眺めた。湘南の海が、日の光を浴びて、きらきらと輝いていた。隼人は、友人が巻き込まれた、奇妙な事件の行く末を、この陽気な光景とは、うらはらに危惧するのであった。

再会

相澤真治は、ブラックの缶コーヒーを飲みながら、駅の待合室にいた。相澤は、一年前に別れることになった真由美の言葉を思い出していた。

「残業、残業って。どれくらい待ってればいいの。」

印刷営業とは、いわば、待つ職業だった。クライアントから原稿があがってくるのをひたすら時間をつぶして待機し、印刷工場へ渡すのが、相澤のミッションだった。残業は、一ヶ月に150時間以上続くこともざらである。クライアントからの急な電話で、深夜や休日の出勤もよくあることだ。そのため、真由美との待ち合わせに遅れることや突然のキャンセルが日常茶飯事だった。

待つのは、得意だった。

「せめて、タバコを吸うのは、やめてね。健康に悪いから。」

別れ際に言った真由美の言葉だ。それ以来、相澤は、タバコを吸っていない。そのせいか、待つのが少し苦手になったような気がした。

横須賀線がホームに到着した。隼人を探した相澤であったが、十年来会っていないにも関わらず、すぐに彼と思わしき人物を見つけることができた。オーソドックスな紺のスーツを身につけ、スマートな体型は、相変わらずだった。また、学生時代と同じく独特な彼の眼光も、何も変わっていなかった。鋭く全てを見透かされてしまいそうな一重まぶたの切れ長の目であり、それでいながら、人を落ち着かせる雰囲気を持つ不思議な目であった。

「久しぶりだね。相澤君。」

隼人も相澤を見つけ、再会をお互い喜び、固い握手をかわした。

鎌倉駅から、二人は、タクシーを捕まえて、写真の屋敷に向かった。屋敷は、高台の高級住宅街にあり、鎌倉の街並を一望できる好立地にあった。駅からは、20分程かかる。夏から秋の変わり目の季節であり、木漏れ日により、木々の陰が道路に揺らめき、その間を軽快に車が走って行った。

相澤と隼人は、この遺産相続事件について、語り合っていた。隼人の調査によると、君塚栄進氏は、昭和初期の生まれであり、ちょうど青春時代が太平洋戦争とぶつかった最も不運な世代である。君塚氏は、インドネシアに派兵された経験を持つ。終戦後、日本に帰国した時に、彼は、両親が東京大空襲で命を落としていたことを知る。彼は、徴兵されるまで、大学で機械工学を専攻しており、その経験を生かして、自動車の部品メーカーを起業した。ちょうど右肩上がりの高度成長に遭遇し、彼の会社は、急激に成長し、多大な財産を築いた。彼は、生涯独身であった。

相澤は、この話を聞きながら、親の死を重ね合わせていた。

（俺は、一人黙々と働く父の背中を見ながら、育った。父の期待に応えようと、俺なりに勉強もして、有名大学に入り、いわゆる一流企業に入れた。しかし、その後は、どうだろうか。日々が淡々と過ぎていき、自分の存在がわからないでいる。君塚栄進氏のように、一人でゼロから成功するだけの実力が無いのだ。実際、この遺産相続の話も友人の隼人に頼ってしまっている。）

相澤は、自分がマイナス思考に陥っていることに気づき、あわてて明るく隼人に相槌をうった。

「しかし、そんな立派な人がなんで結婚しなかったんだろうな。不思議だよな。」

隼人が何か言いかけた時に、タクシーが停車した。目的地である君塚邸に着いたのだった。

青々とした木々の中に君塚邸がある。玄関から、屋敷までは、石畳になっており、そこを通りながら、君塚邸の庭の様々な光景を眺めることができる。君塚氏がこだわりをもって選んだ木々や草花が植えられており、日本独自の四季の美しさが堪能できるように工夫されていることが容易に想像できた。おそらく、もう一ヶ月後であれば、赤やオレンジの紅葉を庭から十分すぎるほど楽しめたであろう。

「美しい庭だけど、君塚氏の死後、誰が、木々の世話をしていたんだい。」

相澤の質問に対し、隼人は、予め調査した内容をすらすらと答えた。

「君塚氏は、草野きねという家政婦を十年ほどやとっており、現在も彼女がときどき来て、屋敷の管理をおこなっているそうだ。」

相澤は、納得し、木造立ての屋敷の中に入ろうとした。屋敷は、二階建てであり、重厚な瓦が屋根を覆っている。一人で住むには、広すぎる大きさだった。相澤と隼人は、一つづつ部屋を見ていった。

リビングは、牛皮の質の高そうなソファがあり、その前には、50インチのテレビがあった。また、テレビ台には、北海道製のフクロウの木彫りが置いてあった。ちょうど2時になり、木造の掛け時計が、ポーン、ポーンと鳴り出した。相澤は、資産家の家と自分の府中の家の違いに気をとられていたため、この時計の音に、びっくりし、なぜか冷や汗をかいた。掛け時計の下には、精緻な木彫りが彫られた高級そうなファックス台の上に電話が置かれている。

台所は、整理整頓されており、草野きねが、丹念に君塚氏のために調理をしていたことが想像できた。和食主体のメニューだったらしく、料亭で使えるような美しい形の皿が棚においてあった。君塚氏が、凝り性であることが伺えた。

二人は、二階に上がり、君塚氏の書斎に入った。

「なんて、本の数なんだ。」

相澤は、思わず感嘆の声を上げた。およそ15畳はあろうかという部屋に巧妙に無駄なく、本棚が配置されており、びっしりと蔵書で埋められていた。政治、経済、宗教と多岐に渡っており、君塚氏の幅広い知識の源泉が示されているのであった。相澤は、その本棚の中で一つのコインを発見した。

「黒猫のコイン？」

相澤は、謎を思い出し、動転した。コインは、ヴァンダインやエラリークイーンといったミステリーの古典的著作が並んでいる棚に置かれていた。

「では、この部屋が黒猫の部屋なのか？」

相澤は、興奮ぎみに隼人に問いかけたが、隼人は、大きく首を振った。

「違うよ。相澤君。おそらく、黒猫の部屋は、別の場所だ。君塚氏は、我々、謎を解く者へのヒントとして、このコインを置いたのだ。そして、おそらく、別のコインもあるに違いない。」

「なんだって。それでは、馬と大蛇のコインもこの屋敷のどこかに隠されていると君はいうのかい。」

隼人は、冷静な目をしながら、軽く頷いた。それでいながら、この故人からの挑戦状ともいえる

コインの輝きに魅せられていた。隼人は、事件の複雑怪奇性に、より一層の興味を掻き立てられたのであった。

コインの探索

相澤と隼人は、君塚邸のコイン探しを手分けして行った。コインが見つかったのは、一時間ほど後のことだった。

「あった。あったぞー。」

相澤の歓声がりびングからあがった。ファックス台の上に馬のコインが置いてあったのだった。

「これが、第2ヒントの馬のコインか。」

相澤は、なんとも言えない達成感を感じていた。相澤は、この事件の解決をすることによって、財産だけでなく、自信も取り戻せるのではないかと期待していた。大成功者である君塚氏は、まだ遠い存在であるが、何も持たない相澤自身の血のつながりを実感させる儀式のように考え始めていたのである。日々の退屈な日常からの脱却。父の死、恋人の別れという相澤の人生の負の要素をプラスの方向に変えてくれるのではないかという期待が、この馬のコインにこめられていたのであった。

「相澤君、すまないが、僕は、少し外出してもいいだろうか。少し調べたいことがあるんだ。すまないが、その間……。」

隼人が、喜びにわく相澤に話しかけた。「わかっているよ。残り的大蛇のコインを探してくれて言うんだろ。」

隼人は、君塚邸をあとにした。その目は、厳しく鋭さを増していた。これから起こることの一抹の不安の現れであった。

相澤は、二階を中心に大蛇のコインを探した。豪邸のため、二階だけで5部屋あり、相澤を絶望の淵に落としこむには、十分な広さであり、作業量であった。馬のコインを見つけたときの笑顔は、すっかり消えうせ、徒労感でいっぱいであった。二階の搜索をあきらめ、階段から降りたところで、時計の音がボーン、ボーンとなった。

「もう、夕暮れか。六時になったんだな。ふう。」

相澤は、ため息交じりにソファに腰掛けた。(いったいどこにあるんだ。大蛇のコインはよう。)

挫折感が相澤を襲った。努力と結果が伴わないのは、いつものことではないか。いや、努力そのものを、最近はしていたのだろうか。会社と府中の自宅の行き来を繰り返す毎日に対し、相澤は、自問した。ふと涙が出そうになるのをこらえた。

ソファの前のガラステーブルに目をやると、一冊の本と紙切れが置いてあった。紙切れには、相澤への伝言が記されていた。

「黒猫の部屋で待つ。」

弓岡隼人」

黒猫の部屋

「ど、どういうことなんだ。隼人は、いったい……。」

相澤は、混乱に陥ったが、伝言状と共にある本に目をやった。

「エドガー・アラン・ポー

黒猫……。」

本の題名を声を出さずに読み上げたとき、相澤の中で何かがつながった。

「そうか、そうだったのか。」

君塚邸は、庭先から下の階への階段があった。相澤が階段を下りていくと、一人の男の影が見えた。

「ようこそ、黒猫の部屋へ。相澤君。」

隼人が、いつもの穏やかな笑顔で地下室の入口に立っていた。隼人は、黒猫の部屋の謎を語りだした。

「君塚氏は、ミステリーの創始者であるエドガー・アラン・ポーの代表作である『黒猫』を謎かけていたのだ。黒猫の主人公は、自分が殺してしまった死体と黒猫を地下室の壁の中に埋めてしまう。そう、黒猫の部屋とは、すなわち、ここ地下室だったのだよ。」 相澤は、自分の推理が正しかったことを知り、満面の笑みになった。しかし、残りの謎が気がかりになり、すぐに神妙な面持ちになった。

「隼人、次の『馬の駆け行く音が鳴り響くとき』とは何なんだろう。馬のコインは、ファックス台の上にあった。電話の音が関係あるのでは。」

隼人は、相澤の考えに対し、軽く首をふった。

「相澤君、電話だと馬の説明がつかないんだ。馬のコインは、ファックス台の上にある掛け時計を指していたのだ。日本では、一日の時間を干支で表していた。すなわち、馬とは、午。『正午に時計の音が鳴り響くとき』という意味だったんだよ。」

相澤は、あらためて、隼人の頭脳の明晰さに感心した。同じヒントを与えられているのだが、その結果の違いが明確だった。

「では、『大蛇の門が開く』とは、どういう意味なんだろう。そうだ。すまない。結局、大蛇のコインが見つからなかったんだ。」

「……。そうだな。相澤君、今日は、もう遅い。続きは、明日の朝にしてみよう。」

地下室から出てみると、すっかり夜も更け、辺りは暗闇だった。3つのコインのうちの2つまでの謎が解けた。明日は、いったいどうなるのだろうか。相澤は、一人では不安になる状況を頼もしい友人、弓岡隼人によって、なんとか乗り切れそうな気がしていた。

大蛇の門

相澤と隼人は、次の日の朝、ホテルからタクシーで君塚邸に向かった。昨日と同じく、爽やかな晴れ晴れとした天気であった。隼人は、窓から外を眺め、鎌倉の緑道を楽しんでいた。隼人は、穏やかに景色をいそしむ心と冷静に事件を分析する頭を同居させる器用な男でもあった。

「昨日は、相澤君に屋敷の中を中心に大蛇のコインを探してもらった。今日は、二人で庭を探してみよう。」

二人は、君塚氏自慢の日本式庭園のすみずみまで手分けして探した。二時間後に相澤が諦め始めていたときに、光る物体を見つけた。

「あった。大蛇のコインだ。」

二人は、笑顔で向き合った。これで全てのヒントが出揃ったことになる。

「しかし、なぜこんな場所に。」

コインは、屋敷の通気口と思わしき場所にあった。

「おそらく、この通気口は、地下室につながっている。」

隼人は、淡々と話した。

「もうすぐ正午になる。黒猫の部屋に下りてみて、もう一度謎を振り返ってみよう。」

相澤は、鬱屈した空気が支配する密室に向かいながら、希望の光を感じていた。相澤は、この事件の目的を君塚氏の莫大な財産譲渡ではなく、謎を解く過程そのものに価値を見出そうとしていた。

「『黒猫の部屋で、馬の駆け行く音が鳴り響くとき、大蛇の門が開くべし。』

これが、君塚氏が残した謎の言葉だが、今までのコインによるヒントにより、

『君塚邸の地下室で、正午に時計の音が鳴り響くとき』となった。残り的大蛇の門だが……。」

隼人は、現在の状況を整理した。

「もうすぐ、時間になるぞ。」

ポーン、ポーン、ポーン、ポーン。

ちょうど正午に時計の音が鳴った。十二回の時計の音が地下室に鳴り響く中、隼人は、部屋全体を見渡した。先ほど大蛇のコインが発見された通気口から、光が漏れている。

「相澤君、電気を消してもらえないか。」

地下室は、外部からの光で照らされるだけの暗がりにも包まれた。通気口からの光は、地下室の壁際にある木製の台座を指し示していた。二人が光が当てられた台座を見てみると、蛇に形作られた三つの紋印が刻まれていたのであった。

「三つの紋……。門か。」

「相澤君、黒猫、馬、大蛇のコインをわたしてくれ。」

隼人は、三つのコインを台座の三つの紋の刻印に重ね合わせて、置いた。

ギイイ、ギイイ、ギイイ……。

反対側の壁の隠し扉が、台座に仕込まれた機械仕掛けにより、自動的に開いたのだった。

遺産の正体

「謎が解けたんだ。」

相澤は、扉の中に駆け寄った。その中には、A4サイズのファイルがぎっしり並べられていた。

「おそらく、それは、切手だろう。」

隼人の言葉に驚きを感じつつ、相澤は、ファイルを開いた。確かにその中は、年代物の切手でぎっしり埋められていた。

「君塚氏は、謎の遺産についても、ヒントを残していたのだよ。遺書の封筒の中に隠されていた紙切れだが、これは、封筒の左上の切れ端なんだ。使用済みの切手を剥がすときに湯につけて、封筒と切手を分離する。その封筒の切れ端だったのだよ。」

相澤は、隼人の推理と、君塚氏の残した遺産に対して、興奮ぎみにファイルをめくり続けた。

「しかし、なぜ、君塚氏は、こんな手のこんだ謎を用意したんだろうか。血のつながった者に遺産を渡すのに必要だったんだろうか。」

相澤が、隼人に対して、ふとした疑念を投げかけたときに、二人の背後から人の気配を感じたのだった。

「それは、私のせいでしょうね。」

二人の前に現れたのは、脂ぎった顔でニヤニヤと笑みを浮かべている鍵本弁護士だった。

「あなた達が謎を解く様子をずっと見張らせていただいていたいました。見事なもんです。敬意を表しますよ。」

「ど、どういうことだ。」

驚く相澤の横で、隼人は、スーツのポケットに手をやり、何かのスイッチを押した。

「私はね。世界各地の切手収集を趣味としてましてね。どうしても手に入らない切手がありましてね。私は、二十年以上探していたんですよ。」

鍵本弁護士は、これ以上ないほど、不気味な笑顔を浮かべた。

「その切手の所有者が、君塚栄進氏だとわかったのは、3年前のことです。私は、担当弁護士として、君塚氏に近づきました。正式に譲り受けようとタイミングを伺っていたのですが、例の謎を残し、君塚氏は、亡くなりました。遺産は、あなたの父、相澤裕明氏に譲るとのこと。謎がわからず、私は、途方にくれました。私は、迷宮入りをぜひとも食い止めるために、あなた達二人を利用させていただいたというわけですよ。」

「さあ、切手を渡してもらおうか。」

鍵本弁護士は、急に語尾を荒らげ、二人を脅した。

「そんなことが通ると思うのか。」

相澤は、苦勞して見つけた遺産を渡すわけがないと心に誓った。

「ふん、これでどうですかな。」

鍵本弁護士は、ふところから改造拳銃を取り出し、相澤に向けた。

「どこから、そんなものを。」

気が狂ったような表情で弁護士は、慇懃無礼な態度で話を続けた。

「私は、切手を探するために、苦勞したんですよ。かわいそうですが、死んでもらいますよ。あなた達の遺体は、この秘密の壁に埋めようかと思えます。ちょうど、ポーの小説、黒猫の主人公のようにね。」

弁護士が勝ち誇った表情を浮かべたところで、突然、隼人が高らかに笑い出した。

「ハハハ、ハハハハハ、ハハハハハハ。」

「あまりにあなたが、全てを話してくれたのでね。拍子抜けしてしまったよ。」

隼人は、ポケットから、今までの会話を記録したICレコーダーを弁護士に見せた。

「これから、殺されるというのに、何の意味が……。」

弁護士は、次第に事態を把握し始め、顔面蒼白になった。

「わ、私の来訪を予期していたということか……。」

警察が、絶妙のタイミングで地下室にやってきた。なすすべもなく、逮捕される鍵本弁護士。

「怖いもんですな。マニアというのは。殺人まで犯そうとするなんて。」

知り合いの警部が隼人に話しかけた。

「ええ、そうですね。」

相澤は、事件の急展開についていけなかったのだが、ようやく隼人の力により、謎が全て解け、背後にあった犯罪の手からも逃れられたことが理解できた。

君塚氏が遺したもの

二人は、帰りのタクシーに乗っていた。隼人は、家政婦、草野きねから聞き出したという君塚氏の生い立ちについて補足した。

「君塚氏が、インドネシアで戦場にいるときに、日本に住む恋人から手紙が届いたんだ。そのときの切手が、鍵本弁護士が探していたいわくつきのもんだ。おそらく、君塚氏の恋人は、彼を元気づかせるために変わったデザインの切手を使ったのだろう。それが、現在、稀少価値となっているんだ。日本に戻った君塚氏は、空襲によって、両親と恋人を亡くなっていたことを知り、何もかも失ってしまったんだ。その切手、その手紙は、彼にとって家族との絆の象徴だったんだよ。」

「そうか、そうだったのか。」

相澤は、外を眺めた。帰り道では、木々の緑の間から、湘南の海が見え隠れする。9月下旬の海は穏やかで全てを包み込んでくれそうだった。

「その切手の名前を知りたいかい。」 「いや、十分だよ。もともとお金に困っていたわけではないし、久しぶりに友人の君に会えただけで、十分だよ。」

「そうか、それがいいかもしれないな。」

相澤は、謎を解く過程において、君塚栄進氏の過去を自分と照らし合わせていた。明日への希望、自分の血に流れる君塚氏との繋がりへの誇り、前向きな情熱が、相澤の心に芽生えていた。それこそが、君塚氏が、相澤に与えた大きな遺産だったのだった。

「黒猫の部屋で、馬の駆け行く音が鳴り響くとき、大蛇の門が開くべし。」